

## デートDVに影響を及ぼす諸要因の分析と DV被害認識の明確化による支援の試み

Analysis of Various Factors Affecting Dating DV and  
Endeavor of Support by Making Clear of Knowledge on Damage from DV

藤田絵理子

FUJITA Eriko

(和歌山県立医大小児成育医療支援室)

米澤 好史

YONEZAWA Yoshifumi

(和歌山大学教育学部)

本研究では、研究ⅠでデートDVに関する大学生の意識調査によりそれらに影響を及ぼす諸要因(デートDVの発生メカニズム、危険性等)をデートDVの特徴である性的暴力に注目し分析した。また研究Ⅱでは心理相談員としてDV被害者支援現場で扱ったケース(10代から40代のデートDV、DV被害女性ケース4事例を検討)から、デートDVの現状、DV被害者の被害意識の明確化に着目し、被害者と支援者間でDVの被害事実について相互確認の作業を試み考察する質的研究とした。これらにより青年期の若者がデートDV等の暴力行為による無用な悲しみや傷つき経験の軽減を目指しつつ、更には健全で平等な人間関係、男女関係構築のために非暴力を学び、選択することによる学習的な世代間連鎖、新たなジェンダー・スキーマの問い直しを提言する。支援者としては支援の道筋を明らかにすることにより被害者のニーズに柔軟に応えるサポート、アプローチを探る。

**キーワード：**デートDV・性的暴力・学習的世代間連鎖・ジェンダースキーマ・柔軟な支援

### 1. はじめに

DV(ドメスティック・バイオレンス、以下DVと略)が社会問題として積極的に認知され取り上げられたのはDV防止法後、未だ7年ほどの歴史であり「デートDV」となると、更に概念としても新しく先行研究も少ないがDVと特徴的な共通点も多い。本研究の目的として、研究Ⅰでは大学生へのデートDVに関する意識調査による量的研究でデートDVに影響を及ぼす諸要因(デートDVの発生メカニズムの特徴、デートDVの危険性)を、デートDVで特徴的な性的暴力、交際相手への束縛などに注目し分析した。また研究Ⅱでは心理相談員としてDV被害者支援現場で扱った実際のケース(10代から40代のDV、デートDV被害女性ケース4事例を検討)から、デートDVの現状、DV被害者の被害意識の明確化に着目しつつ、被害者と支援者間でDVの事実についての相互確認の作業を丁寧になぞる支援の試みから今後のDV支援を考察する質的研究とした。これらにより青年期の若者が、本来は信頼関係や安心感を育む関係であるはずの恋人同士で発生しているデートDV、暴力行為の経験増加への予防的研究とし、更に健全な人間関係、男女関係構築のための警鐘、提言とする。また支援者としては支援の道筋を明らかにすることより、今後の有効かつ被害者のニーズに対応できる柔軟なサポート、アプローチを探る。デートDVの実態については神戸市における高校生の男

女共同参画と男女間暴力に関するアンケート調査報告書(神戸市内の全日制公立高校に在籍する高校生2697名が質問紙により回答、平成19年10月から12月実施、男女比、ほぼ同じ)によると、これまで現在交際している人がいる(全体の44.6%)人のうち暴力にあたるいずれかの行為をされた経験があるのは33.6%。女性の方が相手を怖いと感じる。暴力にあたる行為があることを理由に交際をやめた人はそのうち3分の1、女性の半数、男性の4人に1人が誰かに相談しており、男女共に相談相手は友人がほとんどである。横浜市の若年層におけるデートDVの実態調査結果からも高校生、大学生では女性の4人に1人の割合でデートDV被害を受け、交際しているカップルの3組に1組の割合でデートDVが起きているとの指摘もある。

### 2. 研究Ⅰ

#### 2.1. 目的

若者の間に広がるDV的な男女の交友関係(デートDV関係)の実態を和歌山大学の学生に質問紙形式で調査する。質問紙は大学生におけるデートDV意識を検証するため、モラトリアム青年期でありアイデンティティ確立の土台をしっかりと据える時期に、自己評価、攻撃性、周囲の人間関係・環境への満足度、家族背景・異性との交友関係から実際の交際相手との関係を考察し、それによってデートDV

傾向や、性役割・ジェンダー意識との関わり、DV、デートDV理解、認識についての変化があるのかについて量的な研究として探る。本研究のため、和歌山大学での調査用に既存の尺度を参考にしつつ全質問項目を見直し調整して作成した。具体的には加害者となりやすい特性（攻撃性、被害者意識、自己評価意識、DV的な特徴）や被害者の特性（不安の高さなど）、また加害者、被害者の相互作用の関係などを分析するため背景となる情報（家族背景、ジェンダー意識、現在の交際についてなど）との関連、さらにDVへの理解度、被害者への同調、DV問題への将来の展望などの問題意識も探る。またデートDVを育む土壌についての分析としては、育った家族からのDVの被害経験（DVの世代間伝達）の影響、以前の交際相手とのデートDV加害者経験、被害者経験の存在との関連も考察する。これらの分析結果により、デートDV被害者や加害者の特性への一考察となり、男女の平等な交際関係の提案、促進となることを目的とする。またDV的特性を理解することで、被害傾向に用心し加害者にも被害者にもならないよう警戒し、実際のデートDV被害者には一人で苦しみを抱え込まず、支援を求める精神的な体制を整えるべく他者（DVについての専門的な知識を持つ）に相談するための勇気と動機付けを与えるアプローチとする。

## 2. 2. 方法

被験者：和歌山大学学生496名（うち有効回答数489名）（男306名、女182名、性別未記入1名）を分析の対象とした。  
 材 料：「1. 自己評価意識尺度」DV的特性を示すアイデンティティを探る目的として自己評価がどのような認識で顕れているのかについて特性的自己効力感尺度（成田ら，1995）から3項目、アイデンティティ尺度（下山，1992）のアイデンティティの確立、基礎から3項目ずつ、自己肯定意識尺度（平石，1990b）、無気力感尺度（下坂，2001）、ユニークさ尺度（宮下，1991）から各2項目を参考に計20項目を作成。「2. 攻撃性尺度」本人が自覚する攻撃性の種類について日本語版Buss-Perry攻撃性質問紙（安藤ら，1999）から攻撃性の種類（身体的攻撃、言語的攻撃、短気、敵意）を2項目ずつ、STAXI日本語版（鈴木ら，1994）から怒りの表出、抑制、制御について2項目ずつ、敵意的攻撃インベントリー（秦，1990）、攻撃性の種類、間接的攻撃、置き換え、アウェア（山口，2004）、自分が暴力的な態度を取っていないかチェックから、イライラ、約束への誠実性を選びさらに賞賛欲求、イライラの反芻性、解釈のゆがみ、被害者意識の項目も含め25項目を作成し、DV的な特性と攻撃性の種類の相関の有無を考察。「3. 人間関係、環境への満足度尺度」本人が現在の人間関係や、環境についてどの程度満足感を示し適応的であることとDV的な特性との関係の有無を比較するため自尊感情尺度（山本ら，1982）を参考に自分や家族、兄弟、友人、恋人、また大学生活に関係すると思われる衣食住、経済面も含めた16項目を作成。「4. 家族への感情、異性との交友関係尺度」DV的特性を育む可能性について本人が、過去に自分の育った家族の背景をどのように認識していたか、家族関係はどうだったのか、親からの

躰けや養育態度、それに対する感じ方、また現在の異性関係の持ち方についての認識を探る。家族機能測定尺度（草田ら，1993）から役割の固定化、親役割尺度（谷井，1993）から干渉、受容、分離不安、自立促進、親の養育態度尺度（中道，2003）から、応答性と干渉、ジェンダー・アイデンティティ尺度（土肥，1996）から性の受容、父母との同一化、異性との親密性について20項目を作成。「5. デートDV関係尺度」現在恋人との関係がある人を中心に恋人との関係性において、どのような自己、他者（恋人）認識を抱いているのかを言語的コミュニケーション（言いたいことが言える、恐怖を覚える、など）、性関係（避妊への協力、月経中の性関係、ポルノの真似など）でのコミュニケーション、互いの行動の自由度についての許容（逐一チェックするか、自由を認めるか、など）で調査する。ジェンダー・アイデンティティ尺度（土肥，1996）から異性との親密性、責任性、性の道具性から3項目ずつを用いLETS-2（Lee's love Type Scale 2nd version）（松井ら，1990）からエロス（美への愛）、ストルゲ（友愛的な愛）を用いこれらにより、DV的特性が、恋人との関係性でどのように影響を与えているか考察する。アウェア（山口，2004）のデートDV、相手と自分の暴力的な態度の見分け方チェックの項目や「自分が～」と能動的な主体としての質問と、「相手が～」という受動的な質問項目も付加し31項目を作成。「6. 性役割、ジェンダー意識尺度」過去においてどのようなジェンダーバイアス（男性らしさ、女性らしさへの縛り）を持って生活してきたのか、また現在どのような性役割の価値観で生活しているのか結婚観、家族感、男女共同参画への意識、性の征服感、支配性についての考え、大学の立地する地元、和歌山の男女の性差に基づく価値観も含めてDVを育む土壌について分析する。性的態度尺度（和田ら，1992）から、性の寛容さ、性の責任性、性の道具性から3項目ずつを用い性差間スケール（伊藤，1997；1998；2000）からジェンダー・アイデンティティの問題についても取り上げ、18項目を作成「7. DV経験・理解尺度」DV、デートDVについての現在の知識、理解の確認のための質問、過去、現在の被害、加害経験（家族からの加害、恋人からの被害、恋人への加害経験）について、DV、暴力への認識や、被害者への共感性から、もし友人が被害に遭った時のソーシャルサポート力や将来、DV問題解決に向けてのどのような展望を持っているかも問い16項目を作成した。

手続き：講義中に集団で実施した。各項目について、質問尺度1、2、4～7については「よく当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」「まったく当てはまらない」の4段階評定（1～4点）で求めた。質問尺度3のみは各項目について、「そのままよい」「おおむねよい」「どちらともいえない」「どちらかといえばよくない」「まったくよくない」の5段階評定（1～5点）で求めた。

## 2. 3. 結果

### 2. 3. 1. 因子分析

各尺度について主因子法・プロマックス回転による因子

分析を行い因子負荷が、30以上の項目をその尺度項目とし26因子を抽出した。

質問1「自己評価意識尺度の分析」青年期のアイデンティティ形成の時期に、どのような自我像が特徴的に顕れ、またDV的な特性と関係性を示すかについて考察し20項目について因子分析を行った結果、3因子を抽出し第一因子は対人関係において自分についての評判に関心が高く、ネガティブにその傾向が作用していると解釈し「自己評価不安」とした。第二因子は自らの意思や思考を大切に、積極的に生き方に反映させようとの願いの表出であり「主体的自己表現」と名付けた。第三因子は対人関係の不信感、日常生活の不満、疲労が顕れており「不満・他者不信」命名した。(Table. 1)

Table. 1 自己評価意識尺度

	I	II	III	共通性
自分についてのうわさに、関心がある。	<b>.698</b>	.005	-.164	.345
誰からも、嫌われたくない。	<b>.605</b>	-.037	-.276	.341
人に褒めたいやうな気持ちで居る。	<b>.525</b>	.023	.209	.297
私の心は、とても傷つきやすく、もろい。	<b>.482</b>	.014	.132	.237
私は、嫉妬深い。	<b>.480</b>	.096	.207	.250
私は、自分らしい生き方を、主体的に選んでいる。	.031	<b>.707</b>	.096	.340
私は、興味を持ったことは、どんどん実行していくほうである。	.060	<b>.654</b>	.035	.305
本当に自分のやりたいことが何なのか分らない。	.263	<b>-.314</b>	.066	.222
自分がどんな人間か、自覚しようとする。	.236	.251	-.050	.109
新しいことを始めても、出だしてつまづくとすぐにあきらめてしまう	.175	-.206	.090	.122
私は人を、信用していない。	.015	.065	<b>.822</b>	.239
私は生活の中で、幸福感をよく感じることがある。	.125	.280	<b>-.532</b>	.336
私は、毎日の生活で疲れを感じている。	.290	.010	<b>.480</b>	.283
だいたいにおいて、自分に満足している。	-.140	.252	<b>-.345</b>	.128
固有値	3.405	2.308	1.679	
寄与率(%)	17.026	11.539	8.393	
因子間相関	I	—	-.082	
	II	—	-.277	

α係数 I = .698, II = .568, III = .570

質問2「攻撃性尺度の分析」DV的傾向に大きく作用する特質として攻撃性が挙げられるが、そのなかでどのような種類の攻撃性がDV的な傾向と特に関わりが見られるのか考察する。25項目についての因子分析を行い6因子を抽出した。第一因子は、苛立ちや、怒りの感情を抑えない傾向にあり「攻撃的表出」と名付けた。第二因子は苛立ちを自己の内面に溜め込むタイプと思われ「イライラの反芻性」とした。第三因子は自分への評価に対して不満を抱いているため「不当な評価」と名付けた。第四因子は自分は直接何かを実行しなくても代行してくれる存在(映画、テレビ、ニュースなどの映像)によって自分の心のもやもやをすっきり解消する(カタルシス…浄化作用)方法で「置き換え」と命名した。第五因子は言語的に自分の要求をはっきり伝えることから「言語的攻撃」とした。攻撃とは言ってもポジティブな面もあるといえるが主張の方法によっては相手を追い詰めることにもなるため、攻撃的な特質とした。第六因子は自

Table. 2 攻撃性尺度

	I	II	III	IV	V	VI	共通性
私は、嫌なことがあっても自分の責を極めて相手と理解しようとする	<b>-.587</b>	.090	.002	-.099	.172	.017	.247
私は、心の中では罵り続けていても、それ外には表わさない。	<b>-.582</b>	.096	.002	.168	-.169	.001	.229
私は、友達に比べれば、より冷静になるほうである。	<b>-.552</b>	-.070	.100	.201	.135	.003	.243
私は、かっとなことを知るのが難しいときがある。	<b>.530</b>	.237	-.159	.058	.279	-.016	.431
私は、嫌なことがあると、ドアをノックして閉めた方がいいこととする。	<b>.387</b>	.338	-.018	.034	-.097	.112	.316
私は、イライラをなかなか抑えきれない。	<b>-.310</b>	<b>.549</b>	.038	.189	-.142	-.047	.360
嫌なことを考えれば考えれば嫌な気分が溜まる。	<b>-.123</b>	<b>.532</b>	.090	-.135	-.020	-.129	.263
私は、誰にも言えないような嫌みの気持ちを抱くような時がある。	-.034	<b>.305</b>	.047	.136	.087	-.187	.341
私は、嫌なことがあると、すっぱり、ふれたい。	.244	<b>.472</b>	.053	-.247	.044	.119	.335
私は、嫌なことがあっても、理由もなかつたことがある。	.238	<b>.424</b>	-.029	.185	-.034	-.005	.339
私は、自分よりもっと、ホメられてもいいと思う。	-.284	.054	<b>.650</b>	-.088	.100	-.105	.235
私は、人から十分な評価をされていない。	-.040	.132	<b>.464</b>	.022	-.075	-.098	.288
私は、自分がやらなければならないことに、注意を払わない。	.244	.153	<b>.390</b>	.110	-.005	.072	.359
私は、ライバルと、他者のせいにしていく。	.297	.113	<b>.380</b>	-.151	-.030	-.070	.334
私は、自分が自分の言う通りにしないイライラする。	.124	.182	.340	.188	.028	-.128	.394
私は、悪い人か悪人か知らずとも悪くはないつもりでいる。	-.044	-.075	.049	-.038	-.027	<b>.850</b>	.198
私は、攻撃的な映画やテレビが好きだ。	-.125	.039	-.105	<b>.627</b>	.110	.003	.212
私は、事件や事故は大きいほど面白いと思う。	-.108	.114	.117	<b>.538</b>	-.020	.101	.226
私は、どんな場合でも自分に正当な理由があるとは思えない。	-.099	.192	-.004	-.316	.023	.271	.154
私は、自分の権利は、譲渡しないです。	.027	-.096	.015	.035	<b>.850</b>	-.015	.282
私は、誰かに不愉快なことをされたら不愉快だとはっきり言う。	-.081	-.007	.063	.064	<b>.807</b>	-.004	.232
私は、嫌なことを思っている人はいない。	-.044	-.075	.049	-.038	-.027	<b>.850</b>	.198
私は、人々にされたら、裏切られたら嫌いだとは思わない。	.109	-.338	-.023	.139	.009	<b>.800</b>	.237
固有値	5.029	2.201	1.729	1.510	1.266	1.026	
寄与率(%)	20.118	8.917	6.942	6.039	4.104		
因子間相関	I	—	0.340	0.553	0.279	0.212	-.038
	II	—	0.519	0.333	0.112	-.040	
	III	—	0.132	0.078	-.034		
	IV	—	—	0.215	-.160		
	V	—	—	—	0.058		
	VI	—	—	—	—	0.058	

α係数 I = .670, II = .696, III = .557, IV = .482, V = .571, VI = .488

分に対する他者からの敵意などを強く認識していないことから「被害者意識の無さ」と名付けた。(Table. 2)

質問3「人間関係・環境への満足度尺度の分析」本人を取り巻く人間関係(自分自身、家族、親戚、友人、恋人、教師など)や環境(衣、食、住、経済状態など)への満足度から、それらとの関係と、攻撃性、DV的傾向などについて考察する。16項目についての因子分析を行い3因子を抽出し第一因子は特に家族との関係にまとまり「家族との人間関係」と名付けた。第二因子は生活環境に関係が深いとして「生活の満足度」とした。第三因子は恋人や親しい人との関係での満足感についてであり「恋人・親しい人との人間関係」と名付けた。(Table. 3)

Table. 3 人間関係・環境への満足度尺度

	I	II	III	共通性
兄弟との関係について	<b>.906</b>	-.031	-.094	.652
父親との関係について	<b>.805</b>	-.115	-.027	.594
母親との関係について	<b>.698</b>	.035	.159	.678
家族の中で居場所について	<b>.557</b>	.022	.382	.760
自分の住環境について	-.330	<b>.824</b>	.118	.567
服装、おしゃれについて	-.084	<b>.724</b>	.080	.538
自分自身について	.209	<b>.685</b>	-.255	.536
現在の住環境について	.277	<b>.645</b>	-.113	.554
食生活について	.129	<b>.641</b>	-.072	.498
バイトでの満足感について	-.201	<b>.510</b>	.225	.428
大学選択の満足感について	.039	<b>.369</b>	.236	.447
恋人との安心感について	-.107	-.107	<b>.977</b>	.701
恋人との関係について	.073	.070	<b>.513</b>	.630
友人関係について	.285	.014	<b>.502</b>	.552
教師との関係について	.323	.083	<b>.441</b>	.569
祖父母との関係について	.268	.129	<b>.434</b>	.552
固有値	6.581	2.162	1.151	
寄与率(%)	41.132	13.513	7.192	
因子間相関	I	—	0.411	0.601
	II	—	—	0.578

α係数 I = .879, II = .733, III = .831

質問4「家族への感情・異性との交友関係尺度の分析」自分の育った家族への感情、異性とのつき合いにおける意識などが、攻撃性やDV的傾向などと、どのような関係性があるのかについて考察し20項目についての因子分析を行い、4因子を抽出し第一因子は自分の育った家族、親への好ましい印象感情が多く「家族への肯定的感情」と名付けた。第二因子は同性より異性との交友を求めるタイプとして「異性との積極的な交友関係」とした。第三因子は親や親からの関わりで否定的な感情を抱いているとして「家族への否定的感情」と名付けた。第四因子は異性との付き合い方に困難さを感じているタイプで「異性とのネガティブな交友関係」と命名した。(Table. 4)

Table. 4 家族への感情・異性との交友関係尺度

	I	II	III	IV	共通性
将来、自分の育った家族のような、家庭をつくりたい。	<b>.725</b>	.011	-.018	.008	.432
自分の家族のことが好きだ。	<b>.878</b>	-.117	-.032	-.001	.465
親とは、納得がいくまで話し合いができる。	<b>.857</b>	.025	.084	-.083	.356
自分の親は子どもとの約束を、よく守ってくれた。	<b>.540</b>	-.016	-.162	.076	.332
私は、友達より、まず親に相談する。	<b>.478</b>	.022	.227	.024	.207
自分が嫌いだとは、親はいつでも認めてくれた。	.256	.056	-.060	.121	.162
親は働いていて、あまり家にいなかった。	-.134	.091	.070	.132	.134
同性の友人より、異性の友人が多い。	.054	<b>.883</b>	-.081	-.118	.546
同性の親友より、異性の親友が多い。	.011	<b>.771</b>	.065	-.082	.552
今までにくさん異性と交際した。	-.027	<b>.463</b>	.086	.232	.330
自分は親に頼らずに生きていくくらい精神的に自立している。	-.182	.232	-.043	-.045	.123
嫌いな人のために体罰を、親から受けた。	.015	-.031	<b>.820</b>	-.070	.264
親からは「男のくせに」「女のくせに」と、よく叱られた。	-.027	-.033	<b>.809</b>	.044	.317
親には愛められるより、叱られたことのほうが多い。	-.134	-.082	<b>.482</b>	-.037	.251
家族は異性との交際にも、うるさく干渉した。	.063	.141	<b>.435</b>	.113	.247
自分の家族の中で、それぞれの役割が決まっている。	.151	.002	<b>.402</b>	-.104	.149
自分の家族は離婚を経験している。	.000	.161	.217	.037	.178
自分は親に反抗的だった。	-.091	.033	.164	.117	.117
異性との交際が長続きしない。	.033	.054	-.038	<b>.808</b>	.301
異性との付き合い方は難しい。	.056	-.192	.004	<b>.558</b>	.275
固有値	3.577	2.255	1.859	1.346	
寄与率(%)	17.883	11.277	8.494	6.730	
因子間相関	I	—	-.040	-.012	
	II	—	0.463	0.050	
	III	—	—	0.209	

α係数 I = .739, II = .750, III = .618, IV = .617

質問5「デートDV尺度の分析」本研究で一番検証したかったデートDVが実際どのような形態で行われているのか、恋人関係にある男女それぞれの意識、感情を問いつき合いの現状からデートDV的な傾向を考察するため付き合っている人々を主な対象とした。31項目についての因子分析を行い、4因子を抽出し第一因子は恋人との平等で、尊重しあう、好ましい関係を語る感情が多く「恋人との平等な関係」と名付けた。第二因子は恋人との性的な結びつきを重視し相手と平等ではなく自己本位に交友を求めるとして「恋人との不平等な関係・性と束縛の関係」とした。第三因子は恋人と物理的には共にいても二人の関係性において緊張しつらいでないことからデートDVの傾向の特徴的な因子となり「寂しさ・無力感」と名付けた。第四因子はお互いの交友関係の自由を尊重しあっているとして「交友関係の自由度」と命名した。(Table. 5)

Table. 5 デートDV尺度

	I	II	III	IV	共通性
何かを決めるとき、恋人との方関係は、平等だ。	<b>.838</b>	-.080	-.009	-.171	567
恋人とのコミュニケーションは上手にしている。	<b>.811</b>	.082	-.138	018	808
恋人といふと、満足感や、充足感がある。	<b>.782</b>	-.099	-.048	173	787
今の恋人を選んで良かったと思う。	<b>.748</b>	.022	-.118	123	811
月経中なら、恋人と性関係は持たない。	<b>.747</b>	-.135	.167	-.150	537
自分の性的快楽より、相手の身体のために、いつも避妊する。	<b>.674</b>	-.028	.141	-.034	478
恋人には、ありのままの自分を見せている。	<b>.663</b>	.096	-.121	151	678
自分の性的欲求と相手の欲求が違っても、自分を感じる事ができる。	<b>.656</b>	-.152	.009	.099	578
恋人を傷つける言葉をしたら、ひたすら謝って許しを請う。	<b>.585</b>	.009	.228	-.046	469
恋人にはひと目惚れした。	.322	.284	.004	-.049	344
恋人とは、友情から発展してじっくり愛情を育てた。	.281	-.079	.177	.258	472
恋人は「自分のもの」と思う。	.276	.289	-.076	.225	372
私は相手の性的魅力に惹かれる。	.154	<b>.758</b>	-.141	-.159	575
人が望むなら、自分は嫌でも、ポルノのまねをしなればと思う。	.000	<b>.853</b>	.012	-.138	533
相手が嫌がってもポルノのまねをさせたことがある。	-.051	<b>.848</b>	-.073	-.136	405
恋人は、私の人間性より性的魅力に関心が高い。	.064	<b>.812</b>	.193	-.271	454
恋人とは性関係で仲直りする事が、多い。	-.242	<b>.485</b>	.169	.246	433
恋人の性的欲求を無視して自分の欲求を優先したことがある。	.245	<b>.441</b>	-.015	.088	451
恋人は、よく不平不満を口にする。	.053	<b>.391</b>	.271	.069	435
恋人は私の行動や交友関係を、逐一、チェックしようとする。	-.120	<b>.388</b>	.260	.136	448
恋人は避妊に協力が無く、妊娠や性病を不安に思う。	-.087	<b>.354</b>	.153	-.002	307
ふざけてでも、身体的魅力をうけたことがある。	-.196	.268	.098	.154	214
恋人といふも、満足感を感じる事が、多い。	-.115	.050	<b>.682</b>	.071	411
恋人のこと、気を使って、自分の気持ちを言えないことがある。	-.131	.016	<b>.547</b>	.017	403
恋人の言動を、時々、怖れと思ったことがある。	.034	.338	<b>.507</b>	-.078	509
恋人といふと、自分が、没落したと感じる。	.164	.073	<b>.488</b>	-.047	356
恋人には、何でも話せる同性の友人がいる。	.045	-.090	.101	<b>.871</b>	542
私は恋人のことを何でも話せる同性の友人がいる。	.126	-.170	.045	<b>.385</b>	454
恋人とは、出来れば結婚したい。	.313	.183	-.251	<b>.479</b>	574
恋人はプライドが高いと思う。	.101	.059	.253	<b>.439</b>	596
自分はプライドが高いと思う。	-.021	-.107	-.045	<b>.375</b>	388
固有値	7.890	3.321	1.915	1.395	
寄与率(%)	25.61	12.649	6.177	4.489	
因子間相関					
I	—	0.238	0.150	0.612	
II		—	0.328	0.254	
III			—	0.276	
IV				—	

α係数 I = .904, II = .805, III = .675, IV = .690

質問6「性役割・ジェンダー意識尺度の分析」本人が抱く自分の性(男性性、女性性)についての概念(ジェンダーバイアス)、男女共同参画意識、性問題への価値観、結婚観、育った地域からの価値観の刷り込み、和歌山のジェンダーについての印象について18項目についての因子分析を行い、3因子を抽出し、第一因子は、特に性についての至上性、支配感ジェンダーの固定的な概念がありDV加害男性の示す特徴に似ることから「DV的傾向」と名付けた。第二因子は性問題に対しての問題意識、男女の性役割へ

Table. 6 性役割・ジェンダー意識尺度

	I	II	III	共通性
性行為を持った相手には、征服感を感じる。	<b>.787</b>	.070	-.147	.437
性的な関係を持っては、相手を支配できる。	<b>.708</b>	-.106	-.042	.477
男女の間に、恋愛感情抜き、純粋な友情はありえないはずだ。	<b>.448</b>	.031	.051	.209
女性は、男性を惹かせないために、気を配るべきだ。	<b>.445</b>	-.064	.111	.258
自分の育った地域は、女性より男性が大切にされていると思う。	<b>.440</b>	.158	-.100	.248
同時期に、複数の人と、性関係を持つことは人間として許される。	<b>.385</b>	-.176	.105	.236
和歌山は、家制度などの因習がきつ土地柄だと思ふ。	<b>.336</b>	.208	.120	.226
性行為感染症が、流行するのは深刻な問題である。	-.061	<b>.637</b>	-.018	.447
青少年の妊娠は、深刻な問題である。	.057	<b>.653</b>	.032	.367
男性の育児参加、女性の社会進出は当然のことだと思ふ。	-.130	<b>.524</b>	.017	.310
まだまだ、男尊女卑の文化は残っていると思ふ。	-.025	<b>.522</b>	.087	.241
女性は、男性に比べ、感情的である。	.088	<b>.402</b>	.158	.259
男性は、女性に比べ、攻撃的である。	<b>.440</b>	-.048	.042	.222
男性らしさや女性らしさは大切にしなれば、と思ふ。	.173	<b>.303</b>	-.125	.132
人間関係や恋愛関係において、男女平等だと思ふ。	-.073	.288	-.073	.136
将来、結婚するつもりはない。	.038	-.044	<b>.830</b>	.754
将来、子どもを持つつもりはない。	.038	.036	<b>.873</b>	.736
性行為は、結婚後のみ許される。	.036	-.112	.261	.174
固有値	3.592	2.237	1.537	
寄与率(%)	19.955	12.430	8.337	
因子間相関				
I	—	0.318	0.318	
II		—	-0.272	
III			—	

α係数 I = .704, II = .850, III = .922

の考えを表すとして「性問題意識・性への理解、役割への固定的概念」とした。第三因子は結婚観、家族観と関連し否定的に表現していることから「非家族主義」と名付けた。(Table. 6)

質問7「DV経験・理解尺度の分析」本人のDV、デートDVへの知識、家族から、また恋人との関係でのDV被害、加害経験、DV被害者に対する共感性、DV問題についての将来の解決、展望について16項目についての因子分析を行い3因子を抽出し第一因子はDV、デートDVの直接的な被害、加害経験として「DV被害・加害者経験」と名付けた。第二因子はDV問題に対しての問題意識、理解を表しており「DVへの理解・意識」とした。第三因子はDV被害者についての特徴を理解し、被害者を非難せずに同調し今後この問題についての展望を持っていることから「DV被害者への同調・DV被害への展望」と名付けた。(Table. 7)

Table. 7 DV経験・理解尺度

	I	II	III	共通性
自分もかつて被害者になったことがある。(恋人から)	<b>.801</b>	-.025	.139	.638
自分は知らずに加害者になったことがある。(恋人に)	<b>.800</b>	.019	.151	.588
自分もかつて被害者になったことがある。(家族から)	<b>.802</b>	.028	.132	.484
知人、友人から、DV(デートDV)の相談を受けたことがある。	<b>.559</b>	.062	-.031	.292
世の中の暴力行為全般(いじめなども含む)が許せない。	-.026	<b>.821</b>	.074	.349
DV(デートDV)被害者は、何も悪くない。	.259	<b>.595</b>	-.100	.182
もし、友人がDV問題に悩んでいるなら助けになりたい。	-.081	<b>.533</b>	.138	.365
暴力は、DV(デートDV)被害者にも、落ち度があるからだ。	.109	-. <b>530</b>	.181	.217
DVやデートDVの問題は今後、解決されると期待できる。	.261	.293	-.103	.103
DV(デートDV)被害者は、相手のペースに巻き込まれる。	-.030	-.118	<b>.496</b>	.171
DVやデートDVの問題は今後、増加すると思う。	.095	-.059	<b>.487</b>	.139
自分なら、DV関係なら早く別れたらいいと思う。	-.165	.051	<b>.483</b>	.275
DV(ドメスティック・バイオレンス)という言葉を知っている。	-.321	-.104	<b>.455</b>	.306
DV(デートDV)被害者、なかなか別れられないのと思う。	.217	-.053	<b>.387</b>	.092
DV(デートDV)は是非、誰かに相談すべきだと思う。	-.243	.241	<b>.384</b>	.452
デートDV(恋人からの暴力)という言葉を知っている。	.162	.007	.288	.084
固有値	4.091	1.905	1.426	
寄与率(%)	25.572	11.905	8.912	
因子間相関				
I	—	-.448	-0.461	
II		—	0.567	
III			—	

α係数 I = .826, II = .495, III = .552

各因子の信頼性を検討するためα係数を算出した。自己評価不安: α = .698、主体的自己表現: α = .568、不満・他者不信: α = .570、攻撃的表出: α = .670、イライラの反芻性: α = .696、不当な評価: α = .557、置き換え: α = .482、言語的攻撃: α = .571、被害者意識の無さ: α = .488、家族との人間関係: α = .879、生活の満足度: α = .733、恋人・親しい人との人間関係: α = .831、家族への肯定的感情: α = .739、異性との積極的な交友関係: α = .750、家族への否定的感情: α = .618、異性とのネガティブな交友関係: α = .617、恋人との平等な関係: α = .904、恋人との不平等な関係・性と束縛の関係: α = .805、寂しさ・無力感: α = .675、交友関係の自由度: α = .690、DV的傾向: α = .704、性問題意識・性への理解、役割への固定的概念: α = .670、非家族主義: α = .922、DV被害・加害者経験: α = .824、DVへの理解・意識: α = .495、DV被害者への同調、DV被害への展望: α = .552

### 2. 3. 2. 相関分析

各因子の関係性を調べるために、全体(質問5を除く)、つき合っている人がいる、つき合っている人がいない(質問5を除く)の3パターンに関して相関係数を求め多くの有意な相関がみられたが特徴的な質問の結果を以下に示す。質問1 自己評価尺度、《主体的自己表現》

(全体の相関) 言語的攻撃、被害者意識の無さ、生活の満足度、恋人・親しい人との交友関係、家族への肯定的感情、性問題意識・性への理解役割への固定的概念では有意な正の相関があった。自己評価不安、不満・他者不信、攻撃的表出、不当な評価、イライラの反芻性と有意な負の相関があった。(つきあっている人がいる群の相関) 言語的攻撃、で正の相関があった。不満・他者不信、イライラの反芻性、恋人との不平等な関係・性と束縛の関係、寂しさ・無力感では有意な負の相関があった。(つきあっている人がいない群の相関) 言語的攻撃、生活の満足度、恋人・親しい人との交友関係、家族への肯定的感情、性問題意識・性への理解役割への固定的概念では有意な正の相関があった。自己評価不安、不満・他者不信、攻撃的表出、不当な評価、イライラの反芻性、異性とのネガティブな交友関係と有意な負の相関があった。

#### 質問2 攻撃性尺度、《置き換え》

(全体の相関) 不満・他者不信、不当な評価、イライラの反芻性、言語的攻撃、家族への否定的感情、異性とのネガティブな交友関係、DV的傾向、非家族主義、DV被害者・加害者経験と有意な正の相関があった。また、家族との人間関係、家族への肯定的感情、DVへの理解・意識とは有意な負の相関があった。(つきあっている人がいる群の相関) イライラの反芻性、DV的傾向に有意な正の相関があった。(つきあっている人がいない群の相関) 不満・他者不信、不当な評価、言語的攻撃、家族への否定的感情、DV的傾向、非家族主義、DV被害者・加害者経験と有意な正の相関があった。また、家族との人間関係、家族への肯定的感情、性問題意識・性への理解役割への固定的概念、DVへの理解・意識とは有意な負の相関があった。

#### 質問3 人間関係尺度、《生活の満足度》

(全体の相関) 主体的自己表現、被害者意識の無さ、家族との人間関係、恋人・親しい人との人間関係、家族への肯定的感情、性問題意識・性への理解、役割への固定的概念で有意な正の相関があった。不満・他者不信、攻撃的表出、イライラの反芻性、異性とのネガティブな交友関係、DV被害者・加害者経験とは有意な負の相関があった。(つきあっている人がいる群の相関) 家族との人間関係、恋人・親しい人との人間関係と有意な正の相関があった。不満・他者不信、家族への否定的感情と有意な負の相関があった。(つきあっている人がいない群の相関) 主体的自己表現、被害者意識の無さ、家族との人間関係、恋人・親しい人との人間関係、家族への肯定的感情と有意な正の相関があった。不満・他者不信、攻撃的表出、イライラの反芻性、異性とのネガティブな交友関係、DV被害者・加害者経験とは有意な負の相関があった。

#### 質問4 家族背景・異性との交友関係尺度、《家族への否定的感情》

(全体の相関) 不満・他者不信、攻撃的表出、不当な評価、イライラの反芻性、置き換え、言語的攻撃、異性との積極的な交友関係、DV的傾向、非家族主義、DV被害者・加害者経験と有意な正の相関があった。性問題意識、性への理解・役割への固定的概念DVへの理解・意識で有意な負の相関があった。(つきあっている人がいる群

の相関) 異性との積極的な交友関係、DV被害者・加害者経験と有意な正の相関があった。家族との人間関係では有意な負の相関があった。(つきあっている人がいない群の相関) 不満・他者不信、攻撃的表出、不当な評価、イライラの反芻性、置き換え、言語的攻撃、異性との積極的な交友関係、DV的傾向、非家族主義、DV被害者・加害者経験と有意な正の相関があった。一方、家族との人間関係、生活の満足度、家族への肯定的感情、DVへの理解・意識において有意な負の相関があった。

#### 質問5 デートDV尺度、《恋人との不平等な関係・性と束縛の関係》

(つきあっている人がいる群の相関) 不当な評価、寂しさ・無力感、DV的傾向、DV被害者・加害者経験と有意な正の相関があった。主体的自己表現、恋人・親しい人との人間関係、恋人との平等な関係、DVへの理解・意識、DV被害者への同調・DV被害への展望については有意な負の相関があった。

《寂しさ・無力感》(つきあっている人がいる群の相関) 自己評価不安、恋人との不平等な関係・性と束縛の関係、DV的傾向と有意な正の相関があった。主体的自己表現、恋人・親しい人との人間関係、恋人との平等な関係、DVへの理解・意識は有意な負の相関があった。

#### 質問6 性役割意識・ジェンダー尺度、《DV的傾向》

(全体の相関) 不満・他者不信、置き換え、攻撃的表出、不当な評価、イライラの反芻性、置き換え、言語的攻撃、異性との積極的な交友関係、家族への否定的感情、異性とのネガティブな交友関係、非家族主義、DV被害者・加害者経験で有意な正の相関があった。恋人・親しい人との人間関係、性問題意識・性への理解・役割への固定的概念、DVへの理解・意識、DV被害者への同調・DV被害への展望では有意な負の相関があった。(つきあっている人がいる群の相関) 置き換え、恋人との不平等な関係・性と束縛の関係、寂しさ・無力感、DV被害者・加害者経験とは有意な正の相関があった。恋人・親しい人との人間関係は有意な負の相関があった。(つきあっている人がいない群の相関) 不満・他者不信、攻撃的表出、不当な評価、置き換え、言語的攻撃、異性との積極的な交友関係、家族への否定的感情、異性とのネガティブな交友関係、非家族主義、DV被害者・加害者経験で有意な正の相関があった。また、生活の満足度、性問題意識、性への理解・役割への固定的概念、DVへの理解・意識、DV被害者への同調・DV被害への展望では有意な負の相関があった。《非家族主義》(全体の相関) 不満・他者不信、置き換え、異性との積極的な交友関係、家族への否定的感情、DV的傾向、DV被害者・加害者経験で有意な正の相関があった。また、自己評価不安、家族との人間関係、恋人・親しい人との人間関係、家族への肯定的感情、性問題意識・性への理解、役割への固定的概念、DVへの理解・意識、DV被害者への同調・DV被害への展望については有意な負の相関があった。(つきあっている人がいる群の相関) DV被害者・加害者経験とは有意な正の相関があった。交友の自由度、DV被害者への同調・DV被害への展望とは有意な負の相関があった。(つきあっている人がい

ない群の相関) 不満・他者不信、置き換え、異性との積極的な交友関係、家族への否定的感情、DV的傾向、DV被害者・加害者経験で有意な正の相関があった。自己評価不安、家族との人間関係、家族への肯定的感情、性問題意識・性への理解、役割への固定的観念、DVへの理解・意識、DV被害者への同調・DV被害への展望については有意な負の相関があった。

質問7 DV理解尺度、《DV被害者・加害者経験》

(全体の相関) 不満・他者不信、置き換え、異性との積極的な交友関係、家族への否定的感情、DV的傾向、非家族主義と有意な正の相関があった。一方、家族との人間関係、生活の満足度、恋人・親しい人との人間関係、家族への肯定的感情、性問題意識、性への理解・役割への固定的観念、DVへの理解・意識、DV被害者への同調・DV被害への展望で有意な負の相関があった。(つきあっている人がいる群の相関) 否定的感情、恋人との不平等な関係・性と束縛の関係、DV的傾向、非家族主義とは有意な正の相関があった。恋人・親しい人との人間関係、恋人との平等な関係、交友関係の自由度、性問題意識、性への理解・役割への固定的観念とは有意な負の相関があった。(つきあっている人がいない群の相関) 不満・他者不信、不当な評価、異性との積極的な交友関係、家族への否定的感情、DV的傾向、非家族主義と有意な正の相関があった。一方、家族との人間関係、生活の満足度、家族への肯定的感情、性問題意識、性への理解・役割への固定的観念、DVへの理解・意識、DV被害者への同調・DV被害への展望で有意な負の相関があった。

2. 3. 3. 重回帰分析

全体、つきあっている人がいる群、つきあっている人がいない群の3グループそれぞれに、質問5デートDV尺度から「恋人との不平等な関係・性と束縛の関係」、質問6の性役割・ジェンダー意識尺度から、「DV傾向」、質問7のDV経験・理解尺度から「DV被害者・加害者経験」をそれぞれ目的変数とし質問1自己評価尺度から3因子、質問2攻撃性尺度から6因子、質問3人間関係・環境への満足尺度から3因子、質問4家族背景・異性との交友関係尺度から4因子、計16因子を説明変数として重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。

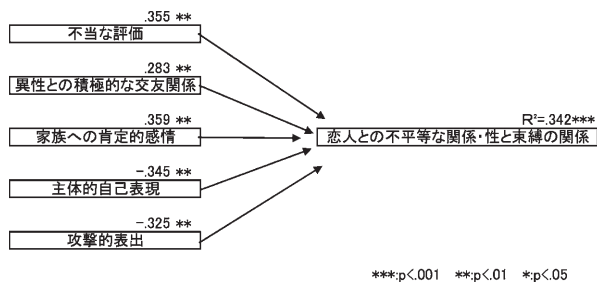


Figure 1 「恋人との不平等な関係・性と束縛の関係」重回帰分析の結果(全体)

全体群では、「恋人との不平等な関係・性と束縛の関係」は、「不当な評価」、「異性との積極的な交友関係」、「家族

への肯定的感情」と有意な正の寄与、「主体的自己表現」、「攻撃的表出」と有意な負の寄与があった (Figure. 1)。

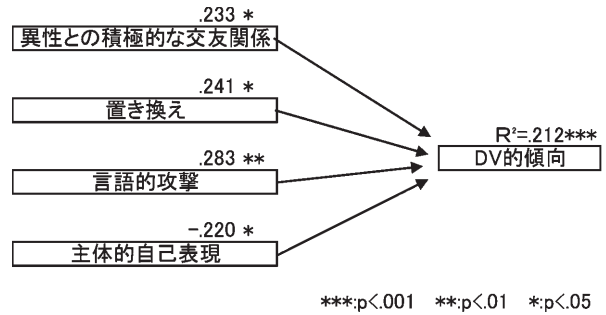


Figure. 2 「DV的傾向」重回帰分析の結果(全体)

全体群の「DV的傾向」は「異性との積極的な交友関係」、「置き換え」、「言語的攻撃」と有意な正の寄与、「主体的自己表現」と有意な負の寄与があった (Figure. 2)。

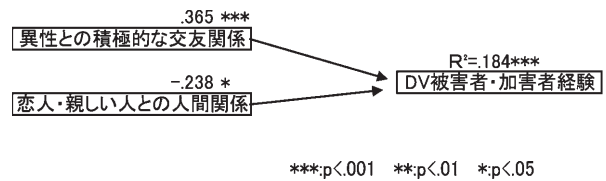


Figure. 3 「DV被害者・加害者」重回帰分析の結果(全体)

全体群の「DV被害者・加害者経験」では「異性との積極的な交友関係」、「恋人・親しい人との人間関係」と有意な正の寄与があった (Figure. 3)。

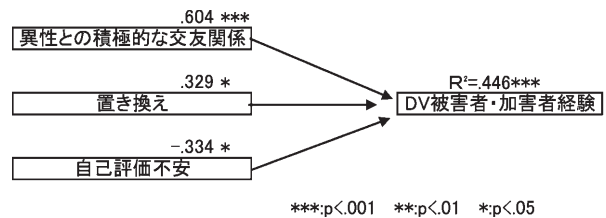


Figure. 4 「DV被害者・加害者」重回帰分析の結果(つきあっている人がいない群)

つきあっている人がいない群の「DV被害者・加害者経験」では「異性との積極的な交友関係」、「置き換え」と有意な正の寄与があり、「自己評価不安」と有意な負の寄与があった (Figure. 4)。

2. 3. 4. t検定

つきあっている人がいる群といない群について、全因子の平均評定値をもとにt検定を行ったところ、つきあっている群(95名)といない群(389名)の間に有意な差が見られ、つきあっている群が有意に高いのは言語的攻撃、(t(481) = 2.05, p<.05)、恋人・親しい人との人間関係 [t(139) = 3.53, p<.01)、異性との積極的な関係 [t(473) =

4.36、 $p<.001$ ）、家族への否定的感情〔 $t(473)=2.09$ 、 $p<.05$ 〕、恋人との平等な関係〔 $t(136.22)=7.97$ 、 $p<.001$ 〕、交友関係の自由度〔 $t(205.58)=7.76$ 、 $p<.001$ 〕であった。一方、つきあっていない群が有意に高いのは異性ととのネガティブな交友関係〔 $t(467)=-2.00$ 、 $p<.05$ 〕、非家族主義〔 $t(187.15)=-3.35$ 、 $p<.001$ 〕であった。さらに男女差についても全因子で $t$ 検定を行ったところ男性（306名）と女性（182名）に有意な差が多く見られ男性が有意に高いのは、置き換え〔 $t(486)=8.26$ 、 $p<.001$ 〕、言語的攻撃〔 $t(486)=2.39$ 、 $p<.05$ 〕、異性ととの積極的な交友関係〔 $t(437.39)=3.11$ 、 $p<.01$ 〕、家族への否定的な感情〔 $t(478)=2.00$ 、 $p<.05$ 〕、恋人との不平等な関係・性と束縛の関係〔 $t(128.92)=2.96$ 、 $p<.01$ 〕、DV的傾向〔 $t(426.99)=5.26$ 、 $p<.001$ 〕、DV被害者・加害者経験〔 $t(434.22)=2.63$ 、 $p<.01$ 〕であった。

反対に女性が有意に高いのは、自己評価不安〔 $t(483)=-2.76$ 、 $p<.01$ 〕、被害者意識の無さ〔 $t(483)=-1.99$ 、 $p<.05$ 〕、家族との人間関係〔 $t(385.29)=-2.90$ 、 $p<.01$ 〕、恋人・親しい人との人間関係〔 $t(142)=-2.84$ 、 $p<.01$ 〕、家族への肯定的感情〔 $t(482)=-2.88$ 、 $p<.01$ 〕、恋人との平等な関係〔 $t(162)=-2.21$ 、 $p<.05$ 〕、交友関係の自由度〔 $t(253)=-2.84$ 、 $p<.01$ 〕、性問題意識、性への理解・役割への固定的概念〔 $t(451.57)=-3.72$ 、 $p<.001$ 〕、DVへの理解・意識〔 $t(474)=-5.20$ 、 $p<.001$ 〕、DV被害者への同調・DV被害への展望〔 $t(432.14)=-3.82$ 、 $p<.001$ 〕であった。

## 2. 4. 考察

相関分析から暴力の世代間連鎖への考察として自分の育った「家族への否定的な感情」を持っていると「攻撃性の高さ、攻撃性の種類の多さ」、「異性ととの積極的な交友関係」、「DV的傾向」、「非家族主義（結婚したくない、子どもを持ちたくない）」、「DV被害者・加害者経験」と関連が深くあり「生活の満足度」は低く「性問題意識・性への理解役割への固定的概念」、「DVへの理解・意識」とは関連がなかった。つまり自分の家族が嫌いだと、攻撃性も高く、異性に関心が向き、DV的傾向も持っており、自身の結婚には関心がなく、家族や恋人からのDV被害経験、恋人への加害経験もあった。家族への否定的な感情には親からのDV被害（質問項目には、親からのしつけのための体罰、褒められるより叱られたなどの項目を含む）の影響も考えられる。しかし性問題、妊娠や性感染症には関心が薄く、DV被害者、加害者の当事者となっている可能性がありながらDVを問題として意識、理解しようとはしていなかった。一方「家族に肯定的な感情」を持っていると先の結果とは正反対で「DV的な傾向」、「DV被害者・加害者経験」も無い。それにも関わらず「性問題・性理解役割への固定的概念」、「DV問題への意識・理解」、「DV被害者への同調・DV被害への展望」の意識は高い。またステップワイズ法による重回帰分析では、全体群のDV的傾向は異性ととの積極的な交友関係、攻撃性の置き換え（カタルシス）、言語的攻撃と有意な正の寄与、主体的自己表現とは

有意な負の寄与があった。 $t$ 検定では男女差にも注目したが男性は攻撃性が高く（秦1990）DV的傾向（性役割における男尊女卑の考え、性の優位性、支配性に関連した項目）も有意に強くそれに比べ、女性は自己評価不安が高い。全体、つき合っている人がいない群に比べ、つき合っている群の方が際立って攻撃性が下がり、生活の満足度が高い。

## 3. 研究II

### 3. 1. 目的

そして研究IIでは、研究Iで明らかになったデートDVにおける性的暴力の実態を踏まえ、実際のケースを通して語られる実例、それに向けての支援、また支援者としての立場においては、せっかく相談をしてくれた被害者に苦しみをさらに負わせる二次被害の加害者になることを極力避け、配慮ある支援の手助けへの模索、研究を目指す。

### 3. 2. 方法

被験者：大学生、またはそれ以外のDVまたはデートDV被害者女性（10代1名、20代1名、30代1名、40代1名）  
材料：心理面接でのインタビュー（来談者によるナラティブな語りを優先しながら、時間をかけて被害者の歪められた認知の再構成に働きかける）と質問紙への記述方式（DV経験者2名のみ）によるケース検討、分析。

手続き：DV支援現場での個別心理継続面接（月一回×半年間以上）

### 3. 3. 結果

4人の女性の実体験のケースにより、親からの虐待が現在の男性観を形作り、交際時、結婚生活の中で男性への恐れとなり自己表現が出来ず、意に反して特に性的な関係において不平等なデートDV、DV被害に遭いながら、状況を甘んじている実態を検証出来た。DV加害者は強烈なトラウマ（主には暴力の恐怖）を被害者に与えることにより、物理的に離別した後も被害者を自分の意のままに遠隔操作する。支援の困難さは、DV関係とは離れてしまえば関係が終わるという単純なものではないこと、加害者が離れた場所においてもコントロール力は依然有効で長期間、充電も必要無い強力なバッテリーが巧みに仕込まれており、被害者への遠隔操作が可能であることを実感させられる実例ばかりで、支援者側がそのことをまず認めることが寄り添う第一歩だといっても過言ではない。強烈な刷り込みによるマインド・コントロールの弊害により被害者は、暴力という正当な理由で別離しているにも関わらず自己嫌悪や罪悪感で混乱し、当事者間のトラウマによって生じている絆（トラウマティック・ボンディング）によって振り回されている状態である。共依存による結びつきに、夫は夫、自分は自分と、自己と他者の境界線を引く作業（レジリエンス）には面接時毎にといってもよいほど、繰り返し慎重に時間を要した。被害女性が「彼は、彼」、「自分は自分」と思えるようになった時、やっと夫を恐れずに自分の人生を自分らしく楽しめるようになってくる。と同時に子どもに関心を向けられるようになり母親としての健全な意識も高まり子どもたちも（時には扱いにくくなる

ほど) 伸び伸びしてくる。更に、具体的な被害予防方策としてはDV被害者の救済に、地域保健・福祉医療全般に関わっている、地元の保健師の役目が大きいと感じる。今回のケースでも家庭訪問でじっくり話を聞き、地元公共サービスの専門相談に繋いでくれたという。スピードも迅速で「ちょうど予約が空いているから…」と心的負担を少なくして誘われ幸いなことに保健師とカウンセラーが彼女を一切非難せず、一致してDVを正確に理解してアドバイスがあったことである。R・ウオーカーは、相談者の役割として「愛情深い親として、苦痛を理解する友人として、共に作業をしたり冗談を言い合える仲間として、女性たち自身が自分を見守るもう一人の自分を見つけるための教師として」を挙げているが被害者が、自らのDV被害認識の第一歩として相談機関の好印象は大変重要な要素でありその後も支援を受ける姿勢の柔軟さや、生活における変化や精神的な傷の回復が好転しやすいなど望ましい特徴が観察された。

### 3. 4. 考察

今回のケースでも若いデートDV世代に特に、父親の暴力の恐怖が男性像を形作り、自分が異性との関係を形成していくとき、男性優位の不平等な力関係で甘んじる、男性は強い、怒らせたら怖い、自分は自分の意思を言わず相手に逆らわず、男性の言うことを聞いておこうという自己像の形成にも大きな影響を与えていた。デートDV被害に遭った女性は、そうではない女性に比べて男性は性衝動を抑えられない、男性は避妊に対して非協力的であるなどに同意する女性の割合が多いなど男性に対する見方が変容している。(井端, 2003) 男尊女卑の枠組みに甘んじた関係を保つことが、彼女らにとっては安心な人間、男女関係なのだが自分の気持ちを抑圧することが続いたら今後の人生では自尊心の低下などを招いていく可能性も否めない。加えてDVにおける性的暴力に関しては研究 I の質問 5 デートDVにおいて、女性にとってはある種の被害といえる望まない性行為に関連し個別のケース面接時でも同様の傾向(男性の性的欲求の優先、女性の性的欲求への無視)が聞かれた。女性にとっても性行為における平等な権利、性の自己決定権(セクシャル・ライツ)としてまた女性として基本的な人権としてのヒューマンライツが保障されるべきであるとの見方(辻村1997)への若者世代への教育、啓発が急がれる。またDV被害者の子ども達についてはどんな逆境にあっても慈愛に満ちた養育や支えさえあれば、外傷体験の害は解毒されるという子どもの柔軟性を希望と愛情をもって支える力強い研究(柳瀬, 2001)もあり、子ども達への継続的な支援環境作りの整備も急がれる。

### 4. 総合考察

研究 I では本人が自分の育った家族に肯定的な感情を持っていると攻撃性は低く、生活の満足度は高く、異性への積極的な交際を求めず、現在の恋人との交際もDV的な関わりでは無く平等な関係で付き合い、本人のDV的傾向も低く、DV被害者・加害者経験が無く、性問題意識やDV問題への理解・同調が高いことが証明された。しかし育った

家族に否定的な感情を抱いていると全くそれと反対の結果になった。育った家庭で対等な人間関係を学んでいるなら青年期の大学時代に自らの男女交際においても性問題意識、DV問題意識を明確に持ち、他者へのDV支援にも関心を向け自らが他人のためのソーシャルサポート資源にもなる可能性も示された。しかしDV被害者、加害者経験の持ち主は、異性との積極的な交際を持ち、恋人との不平等・性と束縛の関係に陥りながらも性問題意識、DV問題への意識が低い。このことから自分はDV問題に巻き込まれていながら真の原因が理解出来ておらず大変危険な状況が推察された。しかし研究結果から交際相手がいることが青年期の情緒的な安定、攻撃性を下げ生活の満足度を上げるなどに影響することも明らかで、なおのこと健全な男女関係の必要性が問われることになろう。さらに研究結果から暴力に直接関係するDV的傾向、攻撃性の高さ、示す種類の多さ、生活の満足度の低さなどについて親から躰けで暴力を受けたり実際のDV家庭で育った大学生は、そうでない家庭で育った大学生と比べ明らかに暴力に関する親和性が高く示された。しかし本研究ではこれらの特徴を運命論的な「暴力(DV)の世代間連鎖」の特徴と簡単に結論することよりも「学習的世代間連鎖」と呼ぶことにする。親からの養育、日常生活のなかで模範的な性役割モデルという直接的な学びは無くとも、本人の気づきや望ましいと思われる新しい学習モデルによりジェンダー・アイデンティティの学び直し、自分らしい異性との平等で対等な人間関係を模索していくことが可能であると提言したい。非暴力的な人格形成をし男性、女性として人間同士として、いかに異性、特に恋人と将来的には配偶者とのように向き合うかへの問いの答えとして青年期にDV関係ではない平等な関係の基礎、柱となる「新たなジェンダー・スキーマを学ぶ」ことは必須である。研究 II では実際DV支援の現場においては「認知の再構成」無くしては、DVで傷ついた人たち、暴力のトラウマを負った人たちの回復は困難であると検証した。つまりDV被害を受けたことによる精神的なダメージからの回復の過程において被害者が自己や異性の精神的、性的な役割に対する認知を平等な関係を軸に柔軟に学び変え再構成できるスタンスを持つことが重要かつ有効であった。具体的には自己の性(男性なら男性である自分)を受容すること、また父母が同性モデルとして有効であれば自分の性と異性の性との葛藤の解決に役立つと考えられる。しかしステレオタイプの男性性や女性性を持っている状態では異性と親密な関係を築くことは出来ないといわれる。ジェンダー・アイデンティティによってジェンダー・スキーマの問い直し、自分らしい個性を発揮することが青年期課題としてぜひとも必要となる(土肥, 1996)。しかし両親の関係がモデルとして有効でない場合(DV関係など)自己の性と異性の性に対して歪んだイメージを抱きDV関係をモデルにする可能性があり自分の性や異性の性との葛藤を解消できないまま交友関係を深める可能性がある。加えて既存のジェンダー観に捉われていると(男は男らしく、女は女らしくなど)その人らしいジェンダー・アイデンティティを形成できず異性との健全で、平等な関係を結びにくくなる。その面で和歌山県、男女共同参画に関する県民意識調査での男女の役割モデルへの回答が示唆となる



が、そこでは男性は親から学び、女性は周囲から学ぶとの回答割合が高く、この一側面からも男女役割モデルの学び方のパターンの違いが考察でき、男性の方が、女性よりジェンダー・アイデンティティを、親モデルから世襲しやすいことが予想される。DVの父親をみて男の子がDVについて学びやすいと乱暴に言うてしまうのは危険であるが、調査から個人、個人が新たなジェンダー・スキーマを作らなければ家庭における男女の役割状態は引き継がれる可能性があることが示された。以上の結果から1. 男性の方が性的な役割固定的な考え（ジェンダーバイアス…男尊女卑の考え、女性は男性を怒らせないために気を配るべきである等）を持ち、特に育った家族での夫婦、男女関係、力関係をモデルとして（世代間伝達）自分の恋人との関係を築く傾向がある。（和歌山県男女共同参画に関する県民意識調査，2007）また恋人と性関係を持つと、その人を支配できるような錯覚を抱く（本研究でも性の至上性として性を重要視する価値観、傾向にはDV傾向と深い関連があった。）ことにより結果として相手を束縛しながら罪悪感を持ちにくく交際相手の女性へのデートDV加害者になっていても自らも気づきにくい可能性もある。またDV加害男性の特徴（バンクロフト，2008）は本研究でもDV的傾向として被害者意識の強さ、どんなことでも人のせいにする、女性や結婚に対して否定的な考えを持っている、セックスを強要するなどに見られる。2. 女性も性的な役割固定的な考え（ジェンダーバイアス…女らしさは大切である、女性より男性が大切にされる、など）を持ちやすく、寂しさ、不安を抱き、特に暴力的な家庭で育った女性は「自分の父親よりも、彼は優しい」と、勘違いしやすい。（E・ミラー，2008）現在の交際相手の束縛を当初は心地よいものと寛容になる傾向も予想され、時経つうちに共依存を招き彼と一体化しているようになりつつも、自分の気持ちが表現（主体的な自己表現）出来ないことへのイライラや絶望感から自尊心の低下、自分の無力感などを味わう。結果としてデートDV関係にありながら、恋人との関係を続ける、被害者となり続ける傾向が窺えた。3. デートDV関係における支配とコントロールが、恋人同士の各々の特性と相互に影響しているかどうかについては、甘えの構造（甘えには自己観と他者観における甘えさせ行動があり、人を甘えさせることに積極的で、人からの甘えを拒絶できない、人に必要とされることへの希求が強く、人を甘えさせられなかった自分に対しては自罰的になる傾向のタイプがある；小林・加藤，2003）との関連で、他者の甘えを許容しないと自分を責めるタイプではDV関係の被害者になりやすいと推察する。またトラウマティック・ボンディングという観点から実際にデートDVが生じ、ひどいDVを経験しても加害者と離れられない理由を考察した。その結びつきには恐怖や、脅しが介在するため、被害者はマインドコントロールを受けやすくせつかく加害者から物理的には逃れても精神的にコントロールが続く。支援現場では、そのコントロールに気づくように仕向け、それが望ましくないとの理解を促し、徐々に被害者自身が加害者への憎悪が明確になり言語化できる時期になると少しずつ境界線が引かれ、分離が始まる分岐点となる。4. DVの被害者（家族から、恋人から）経験、デートDV加害者（恋人に）経験を持つ群とDVを経

験したことが無い群とでは、明らかに本人のDV的傾向に差異があり、暴力との親和性と世代間伝達について認められた。5. 質問紙の質問5では、特に交際相手との性的暴力被害の具体例を取り上げることでデートDV被害者が恥ずかしくて相談出来ず自らの判断だけで「みんながしていること」と思い込み我慢している行為と、DVに関連した性的暴力行為について問題提起とした。研究IIではDV、デートDVで特に性的被害の認識の低さについて4人の女性の実体験により、親からの虐待が現在の男性観を形作り、交際時や結婚生活の中で男性への恐れとなり自己表現が出来ず、意に反して被害に遭いながら、状況を甘んじている実態について検証出来た。DV加害者は強烈なトラウマ（主には暴力の恐怖）を与えることにより、遠くからでも被害者を自分の意のままに操作し、混乱させ、トラウマによって生じている絆（トラウマティック・ボンディング）を断ち切るとは本当に難しい。これに有効な手立ては、時間、正確な情報、そして支援者の共感性、ジョイニング、リフレミングの繰り返し、グリーンワーク（失ったものへの悲嘆）など被害者の身の上で起こったことについて専門用語を噛み砕きながら丁寧に命名していく作業も必要である。今扱わねばならないこと、後回しに出来ることの振り分け作業にも同伴しわずかに残された被害者の決定能力（被害女性の自己決定能力は極めて低くなる；ハーマン，1999）を節約しながら、経済面を含む生活再建や子どもと夫抜きでの新たな関係にも焦点を当てる必要もある。性的な暴力についてはなおのこと混乱があり概念の明確化は難しいが被害者との信頼関係を積み重ねながら、今回の研究では「不快は不快である」との当人の感覚を信じた枠組みで整理をした。人間は意志、つまり内省的な自己との対話ができるなら（フォナギー）また周囲のソーシャル・サポートを有効に受け、学びにより変容できる可塑性があると信じると共に心理臨床の分野では、有効性や常識を過度に求めず、被害者に合わせた支援者の側の柔軟性を大切に気長な支援を試みたい。社会における若者への早期の予防的な関わりとしては今後高校生へのデートDV教育の整備、市役所、保健所、可能なら女性相談所などDV相談機関への社会見学により専門相談機関の所在、存在、目的をアピールすることにより福祉資源を広報し若者が相談相手として友だち以外の専門家を選び活用する機会の拡充のためハードルをさげる尽力も必要であろう。

#### 参考・引用文献

- Ann L. Coker 2000 Dating violence affects both victims and perpetrators.
- Diann M. Ackard&Dianne Neumark - Sztainer 2002 Dating violence and date rape among adolescents: associations with disordered eating behaviors and psychological health. *Child Abuse&Neglect*, 26 (2002) 455-473.
- アリス・ミラー 2001 闇からの目覚め 虐待の連鎖を断つ.
- ボリス・シリユリック 2002 壊れない子どもの育て方 斉藤学監修 KKベストセラーズ.
- ディズニー映画 ピノキオ.
- 土肥伊都子 1994 心理学的男女両性具有性の形成に関する一考察 *心理学評論*, 37, 192-203.

- 土肥伊都子 1996 ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成, 教育心理学研究, 44, 187-194.
- Elizabeth Miller, MD, PhD. Department of Pediatrics  
US Davis School of Medicine 2008  
“Adolescent Relationships, Violence, and Health” エリザベス・ミラー特別講演会, 「若者のデートDV:恋愛関係, 暴力, 健康」2008年6月17日大阪厚生年金会館.
- 秦 一士 1990 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究 **61**, 227-234.
- 畑下博世, 森田孝恵, 石川由美子 2003 ドメスティック・バイオレンスの3つの要因, 保健師雑誌, **59(12)**, 1154-1158.
- 平川和子 1995 「家族の再生—カウンセリングからみた離婚事情」, 日本婦人問題懇話会会報, No.55.
- 衣斐哲臣 2008 子ども相談・資源活用のワザー児童福祉と家族支援のための心理臨床— 金剛出版.
- 井端美奈子 2004 デートバイオレンス予防に関する臨床教育学的研究.
- ジュディス・Sウォーラー・スタイン 1997 高橋早苗訳 セカンドチャンス離婚後の人生, 草思社.
- 小林美緒, 加藤和生 2003 「甘えさせ行動」タイプについての実証的研究 九州大学紀要.
- 川崎由岐子 2006 高校生等の若者の性と生の行動の自己決定を支援する地域支援体制づくり, 財団法人 大同生命厚生事業団.
- Lenore E. Walker 1993 Survivor Therapy Clinical Assessment and Workbook.
- レノア・E・ウォーカー 斉藤学監訳 バタードウーマン 金剛出版 1997.
- 宮下一博 1991 大学生の独自性欲求の類型化に関する研究, 教育心理学研究, **39(2)**, 214-218.
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—, 教育心理学研究, **40**, 121-129.
- 宮下一博 1991 大学生の独自性欲求の類型化に関する研究, 教育心理学研究, **39(2)**, 214-218.
- 内閣府 2006 平成18年版 男女共同参画白書.
- 日本DV防止・情報センター 2007 デートDVってなに?Q&A, 解  
放出版社.
- ランディ・バンクロフト 2009 DV・虐待加害者の実態を知る, 明石書店.
- Silverman et al. 2004 Partner violence among teen girls linked with: [YRBS data], 「若者のデートDVと性的リスク」.
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—, 教育心理学研究, **40**, 121-129.
- 反町あゆみ 1994 帰国高校生の「適応感」に関する研究—その規定要因と時系列変化について—, カウンセリング研究, **27**, 1-10.
- 田中存・菅千索 2007 大学生生活不安に関する心理学からのアプローチ, 和歌山大学教育学部紀要, **57**, 15-22.
- 谷井淳一・上地安昭 1994 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係, 教育心理学研究, **42**, 185-192.
- 友田尋子 2003 DV家庭環境下にいる子どもの問題, ペリネイタルケア, **22(5)**, 55-54.
- 友田尋子 2000 DVの危険にさらされている子どもたち, 日本DV防止・情報センター (編) ドメスティック・バイオレンスへの視点 朱鷺書房.
- 上村茂仁 2006 地域のデートDVの実態把握とその現状に基づいたデートDV防止プログラムの作成, 財団法人 大同生命厚生事業団.
- 和歌山県 2007 男女共同参画に関する県民意識調査報告書.
- 和歌山県女性相談所・和歌山県女性保護施設なぐさホーム 2008 女性相談の概要.
- 柳川敏彦 広報 紀の川 2008,12 あなたが悪いんじゃないDV パートナーからの暴力, 暴力の子どもへの影響 和歌山県紀の川市.
- 柳瀬一代 虐待と離婚の心的外傷 朱鷺書房 2001.
- 柳原良江 2003 性行為における女性の身体と人権の位相 早稲田大学大学院, 人間科学研究科.
- 山口のり子 2004 デートDV防止プログラム実施者向けワークブック 梨の木舎.